

早稲田ヨットクラブ

会報

第14号

昭和58年7月 発行

発行所 事務局 舟岡 正
編集・広報 石田 晋也
会費振込先 松島 弘行
第一勧業銀行 日本橋支店
普通預金 四四五七二九
口座番号
ワセダヨットクラブ 杉山博保

松山勲氏 隈部 鵬氏 両副会長の訃報

理事長 杉山博保

去る三月一九日、松山勲副会長が亡くなられ、次いで三月二十八日には隈部鵬副会長が死去されました。

今年一月に池口俊夫氏(17卒)、二月に尾崎博氏(42卒)が亡くなられており、わが早稲田ヨットクラブにとって悲しいシーズン開けとなりました。

松山さんは、新東京いすゞモーター(株)の会長をこの一月迄勤めておられ、多忙な日常であるにも拘わらず、わがヨットクラブの発展に心から関心を持たれ、二年前YCCで開かれた四大学OBレースの前後祭では、大きな声で校歌を歌ってくれたり、昨秋十一月には病軀を押して葉山の新人インカレに学生を激励に行ってくれました。

昭和三十一年前後のヨット部に在部していたOB諸氏にとっては、当時のヨット部運営資金の最大スポンサーが松山先輩であったことを良く記憶している筈です。

隈部さんは、三菱商事の隈さんとしてヨット界では有名な方で、オール三菱ヨ

昭和58年7月 発行
発行所 事務局 舟岡 正
編集・広報 石田 晋也
会費振込先 松島 弘行
第一勧業銀行 日本橋支店
普通預金 四四五七二九
口座番号
ワセダヨットクラブ 杉山博保

ットレースを企画したりされました。

又、早稲田ヨットの良心的代表として日本ヨット協会で発言された方でもあります。昨秋、日本ヨット協会創立五十周年の記念パーティーではお元気を姿を見せて下さいました。

その後、大隈会館で開かれた小澤会長叙勲祝賀会では、身体の不調から欠席されました。

ヨットクラブの大きな会合には必らず出席して下さい。隈部さんがこの時から出られなくなり、理事会でも話題となり、一時手前が成功したとの報で安心した矢先のこと、まさか病がこの様に重く、亡くなられるとは誰も思いませんでした。

両副会長の葬儀には、小澤会長をはじめ多数のOB、学生が参列し、柩を送る時には部旗を掲げ、「都の西北」をしめやかに斉唱しました。

故松山、隈部、池口、尾崎各氏のご遺族の皆様が改めて心からお悔やみを申し上げると共に、四氏のご冥福をお祈り致します。

池口俊夫君を偲ぶ

十五年卒 間瀬友晴

後輩の池口俊夫君の追悼文を書くことは誠に辛いことである。

ハンサムで気づぶが良く、誰からも愛された池口君。実業界にあつては、若くして独立し、不動産業を営み、日覚ましい活躍をして将来を嘱目されていた。

彼は戦後壊滅状態にあつた名古屋のヨット界再建に多大な盡力をつくし、特に昭和二十五年の愛知国体の開催に当つては、東海ヨット連盟理事として八面六臂の働きをした。

二十二年から三年間、愛知県代表選手として国体に出場し、二十二年博多湾で、これ又、今は亡き村瀬美隆君と組んで、

尾崎博君永遠に

四十二年卒 岡戸善一

私は、昭和五十八年二月四日を、生忘れることが出来ない。

三九歳、友人の突然の死、こんなつらいことはもう経験したくない。友が人生の幾山河を乗り越え、やがて皆、散っていくのはわかつてはいるが、余りに早い散りに驚きと、怒り、悲しみを感ずる。尾崎よ、そんなに急ぐことないじゃないか。

尾崎のヨットに対する情熱は、学生時代より卒業後、「月光」のクルーになっていた時の方がまさっていた。キャプテンの私としてはその点、大変残念であった。尾崎の太った体は、いつもグループの中心的存在として誰からも親われていた。そんな彼がなぜ……? 今もって海上を漂っているのだろうか……。トランパック、チャイナシー、パンナ

実業団スナイプ級で優勝した。

彼の奥さんは、旧姓千田さんで、二年の石川県国体に出場した折、テニスの選手として同じ汽車に乗合せたのが馴れ初めで、世話好きのヨット仲間が七尾に着いてからアートの約束に走り回り、二人をとうとうその気にさせてしまった。

名古屋の早大OBは、東海ヨットクラブに籍を置き、村瀬君を頂点とし、池口君がアシストし、佐伯実君と小生の四人で真夜中を過ぎるまで酒を飲み、賑やかに、楽しく、堅い友情で結ばれていた。

先に村瀬君、今また池口君をじくし、淋しい限りである。幸い、良き後輩も出ているので、皆が力を合わせて伝統の灯をいつまでも受継がれんことを心から願う次第である。

ム・クリッパ、アドミラルと世界の大陸レースを経験した尾崎。真黒な顔の彼からレースの模様を聞く私の心に、彼の活躍が少なからず興奮を与えてくれた。尾崎は、やりたいことを思う存分にやった。男として大変幸せだったと私は考えたい。

尾崎と私は住まいが同じ荒川区で、よく遊びにきたし、麻雀も週に一、二回やるようになった。彼の麻雀は学生時代から強かったようだ。私は卒業後、麻雀をやりましたので初めはよく負けた。彼の麻雀に対する熱意も、ヨットに賭ける情熱も一途なものがあつた。

彼の麻雀は一口に言う強い、なかなか負けない。また、めっぽう麻雀が好きであつた。相手を捜す時には非常に根気がよかつた。そんな彼だから、商才もあり、いろいろと考えた商売をしていた。そんな尾崎の体の変調に気づいたのは

今年の始め頃であった。声がよくでなくなり、咳は三年前よりひどくなっていた。特に卓を囲んでいとよくした。

尾崎は『昨年の夏、病院で見てもらった。太っているが、いざと言われ、やせるように一日、二キロロリーに抑えているんだ、だからだろ。』

そんなことないだろうにと私は不思議に思った。

しかし、麻雀をするたびに顔色のよくないのは気になり心配していたが、タフネスを誇る彼なので、まさかと思っていた。

そのまさかになってしまった。二日八日夜十時頃、自宅で吐き気をもよおし、脈拍が異常に早くなり、ついに彼は、帰らぬ人となってしまった。

若死にした尾崎を忘れないよう、二月八日より私はタバコをやめた。今後、尾崎の為にタバコを吸うことはないであろう。

~~~~~  
**シーホッパー 《松嶋》**  
 ~~~~~

過日、故松山・隈部先輩のご遺族より小澤会長を通じてヨット部にご寄附をいただきました。

ヨット部では両先輩のご意志を尊重しフレッシュマン養成用として一人乗りの艇、シーホッパーを購入。

松山先輩の『松』隈部先輩の『鵬』を採り『松鵬(しょうほう)』と名付けました。

~~~~~  
**会費とご寄附のお願い!!**  
 ~~~~~

58年度会費は一万円です。ご失念された未納のOB諸氏には会報に振込用紙が同封されており、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

関東インカレ二連勝ー 定期戦・慶応に圧勝!!

監督 加藤文生

春、恒例の関東大学ヨット選手権大会は、4月27日から5月5日迄、森戸海岸にて、連日熱戦が繰広げられました。

昭和九年、品川の目黒川河口沖にて、第一回大会が開催されてから、今大会が50回目になり、これに際して数々の記念行事が行なわれ、本学からも小澤会長が永年学連に尽くされた功績に依り表彰されました。

関東学連加盟校も現在49校と増え、予選を通過し、決勝に進出する事が、仲々難しくなりつつ有る時に、早稲田チームは、Bブロック予選で他校を圧倒する力強さを見せ、470級、S級共に第一位にて決勝に臨みました。

有力校である慶応470級、立教大470級は、決勝に進むこともできず無念の涙を飲みました。

決勝は、微風に悩まされながらも早稲田は好調な滑り出しを見せ、例年良きライバルとして戦っている日本大学チームを引き離して初日を首位で終る事ができました。

2日目も前日に引き続きの微風の中心が強敵日大のセーリングは絶好調で、ついに逆転され、我がチームは第二位と落ち、最終日の一レースに賭ける事になった。

その晩の座学は熱も入り、技術論ぬき精神論一本やりの私、そして若干OBの訓話に、部員達もやる気十分。何としてでも昨年に引き続き二連勝す

るんだの心意気、技術では日大に劣るが闘志では負けないぞと……。

最終日も引き続いで微風、僅か日大に12点の負け、出艇する選手達の顔にも熱気がこもり、さあやるぞの気合十分。

両校共、これ以上は望めない快走に次ぐ快走。

関東インカレではなく、あたかも早稲田対日大の定期戦が行われている様相、押えたり、押えられたり、歴史に残る白熱したレースを展開し、最後は僅か一点差で、日大に大逆転。

学生達は自分の持てる力を十二分に発揮し、昨年に続いで優勝。早稲田ヨット、精神力の強さを他の人学に誇示した。

~~~~~  
**早慶定期戦**  
 ~~~~~

インカレ二連勝の感涙も醒めやらぬ、6月4日、5日と二年間中断した早慶戦が快晴の中、三戸浜の地で復活。

今年から久し振りに両クラス5艇づつの出走となった。

早稲田は全レース、好敵手慶応を上回り、パーフェクトで完勝。近年になく点差も大きく開き、小澤会長を始め、永元、石井、松本、浜田、安藤、杉山、舟岡、武村、清水(栄)の老々先輩諸氏も大喜び。祝勝会もかつてない盛り上りを見せ、部員の演芸大会にも熱が入り、8月25日から28日迄、地元江の島で行われる全日本に向け、誠に良いムードでスタートが切れました。



このように戦後初のインカレ二連勝と早慶戦に於る圧勝と云う偉業を達成出来ました裏には、四年間部に在籍しながら一度も舵を持ってレースに出場する事もなく卒業して行く部員、そして卒業した若手OB諸氏に改めて感謝したい。

ヨット部の将来の為にと君達の縁の下力がなかったならば先ず関東インカレ二連勝はなかつたであろう。本当に有難度う。

小松コーチを始め、若手OBの献身的な努力にも改めて感謝いたします。部員達は必ず全日本インカレを制覇してくれる事と思います。

ヨット部五十年史 着々進行!!

早稲田ヨット部50年の航跡をたどる部史編纂は、編集委員諸氏の努力で、着々前進しております。5年区切りの委員の方から、皆さん方に声をかけていただき寄稿、資料提供をお願いしております。ただ何分、全員多忙な身のかたわら作業している事として、伝達の不徹底にて一部の年度につき資料が揃っていない部分があります。

また、同じ内容が重複している年度もあり、これは編集委員が整理中であります。ここで、皆さんに編集委員会が今画いている完成予定図を事前公開致します。これを参考に、貴兄ご自身の一筆をお寄せ下さることをお願いします。

- 五十年史 目次(案)**
- 序章 黎明、葉山の海、西宮の海
 - 1章 早稲田にヨットクラブ誕生
 - 2章 学生レース本格化
 - 3章 躍進、二度の完全制覇(11年、14年)
 - 4章 戦時下の海洋競技
 - 5章 学徒出陣
 - 6章 終戦、霧からの再出発
 - 7章 力強い復活
 - 8章 早風の雄姿
 - 9章 潮氣をつけれ
 - 10章 全日本を制す(30年)
 - 11章 名物監督ガトーヤン(次頁会報参照)
 - 12章 ホクはワセダのヨットマン誕生の周辺
 - 13章 スナイプの発展と世界への挑戦
 - 14章 あ、早風と鍛えたり(早風の遭難)
 - 15章 小島合宿所と早風碑
 - 16章 再起、相模灘へ
 - 17章 東京オリンピック、OB陣の活躍
 - 18章 稲語進水

- 19章 大学紛争下のヨット部
 - 20章 新時代への胎動。A-12全日本優勝
 - 21章 名艇A-12
 - 22章 稲龍日本一周
 - 23章 オーシャン・レースに挑む
 - 24章 470時代の開幕
 - 25章 早慶レース四連覇と関東インカレ連覇
 - 26章 同志社へ国内留学
 - 27章 全日本をとり
 - 28章 稲龍。この尊きものクルージング記録
 - 29章 OB達の結束とその活動
 - 30章 レスキュー物語
 - 31章 表技講習の歴史と意義
 - 32章 明日の早稲田ヨット
 - 33章 造船所から
 - 34章 セール・メーカーと早稲田
 - 35章 合宿所の変遷
 - 36章 名艇データ集
 - 37章 回航の歌
 - 38章 年表
- (注) 全篇に写真をちらす。記録やカットを多く掲載する。

貴殿のご寄稿・資料提供が50年史を完璧なものにいたします。50年史の次は百年史までないかも知れませんが、必ず貴兄の航跡を部史にとどめて下さる様期待しています。今日、森繁久弥氏のご寄稿を入手いたしました。限りなき悔と艇への愛着を「**海**」(編集委員会)

実技のお知らせ

五十八年度シーズン実技は、岩井海岸で十五ハイクの艇を使用して行います。

- ①九月二日(廻航三戸浜→岩井)
- ②九月三日〜九日までA班集中授業
- ③九月九日〜十五日までB班集中授業(両班とも各々九十名)
- ④九月十七日廻航(岩井→三戸浜)

OB諸兄のご参加を歓迎します。講師 安藤記

「求む・クルー」

名古屋の村瀬さん②③卒がJ-24のクルーが足りず困っています。

ロプスターⅢは西浦(蒲郡よりや、西)の「ニッサンマリナー東海」をホームポートとして、「三河湾フリート」のポイントとして、現在第二位で頑張っています。J-24級は小型ながら戦術的なクルーザーとして、レース好きのヨットマンの間で世界的に普及しており、一九八五年には三河湾で世界選手権が開催される予定です。

村瀬さんとしてはロプスターⅢでは是非出場権をかちとりたいと張切っておりはす。ワセダOBとして、ロプスターⅢを

- 紺碧Ⅲ建設費決算報告**
- レスキューポート紺碧Ⅲ建設費につきまして寄附を下さっていました。左記の通りです。有難うございました。
- 数字は千円単位(敬称略)
- 安藤 夫 66 岩本誠 50 杉山博英 50
 - 中田忠雄 50 加藤文生 70 原田弘 50 倉谷誠一 20 石井哲 10 大矢木一 50 北島武夫 40 青木博和 64 近岡保博 48 赤松幹男 64 藤井達也 64 恒川由吉 58 庄司健一 50 大島徳次郎 64 冬至克也 64 角田貴士 64 川瀬修平 64 岩崎誠 64 齊田治 64 大原義昭 64 渡辺亨 64 見出健 64 酒井俊夫 64 光武勝広 64 野口正文 64 橋本一彦 64 庄島政美 64 北川邦広 64 松下政弘 64 小川寛樹 48 白石裕之 64 坂爪高一 53 伊熊孝雄 48 杉原央和 48 市村彰治 48 井上昌治 30 風間利也 64 地曳克二 66 香田錦也 64 中島健治 64 長谷山裕 48 川上弘恭 64 橋滋夫 30 後藤ヒデ子 10 戸枝隆也 64 河瀬健道 10

応援し、われと思わん人は左記へ連絡して下さい。

○五二(五三一) 九五三五村瀬治美氏

早稲田実業・準ヨット同好会発足!!

三十三年卒清水OBのご子息、宏和君が中心となりこの度同好会が発足。六月十八日に会員の母親が合宿所、大学部員の練習をつぶきに見学。危険なスポーツではないとの理解を得られた様子。会員数は八名。将来は学院生共々、金の卵として頑張ってもらいたいと思えます。

小沢会長が此度、日本学生ヨット連盟の会長に就任しました。任期は三年です。

監督 加藤記

紺碧Ⅲ建造費決算報告書

収入の部		支出の部	
寄附金	3,085,000円	レスキュー本体	3,000,000円
アルバイト料	124,500	船台他	190,650
雑収入	9,000	通信費	8,500
利息	7,569	雑費(進水式等)	24,500
		残高	2,419
	3,226,069円		3,226,069円

石川清 喜多内悦郎 長瀬勇人
 芝崎俊之 石渡一浩 小池允郎
 故羽生先生の奥様より

会計 中島健治

11章 名物監督 ガーチャン 高原清彦氏(昭和28~29年)

「ガーチャン」最後のヨット

昭和28年4月の横浜の海。スナイプ4艇、A12が10艇で練習をしている早稲田のヨット群に、一隻のシーホースが近づいてきた。

「みんな 良く走っているな」
そういって、ミカンをいくつか一隻のスナイプに放り込んでくれた人がいた。学生の誰も、その人を知らなかった。学生の一人が岡本のオヤヂにきいてみた。小さな背をまるめて、あの岡本のオヤヂが「そんなこと知らないのか」という顔付きで言った。

「ガーチャンだよオ」
「えっ？」
「高原さんだよオ」
「シーホース作ったのか」
「あ、」

親父は行つて了つた。これが、戦後のガーチャンがヨット部と接触した始めらしかった。そして五月の早慶戦。何はともあれ敗けであり、初の四連敗となつた。

早慶戦閉会式の後、OBたちが協議して監督制を決定し、高原清彦氏が就任した。それまでのヨット部は監督制度がなく、常に学生主将の統率指導の下にすべの運営が為されていたので、この高原氏が初代監督である。

「ガーチャンのイメージ」

当時の学生らがきくガーチャン像は、

誠に個人的であつた。

現役時代のガーチャンのクルー振りはすごかつたという。荒天下のレース、水船になつた時のアカ出しのまさまじさ。あつという間に浮かせたという。

舵を下級生に持たせ周囲を良く見極めて威力を発揮した人だという。「タツク」と指示するガーチャンの状況判断は常に正確だつたと伝えられる。

父君は海軍の大物であり、氏も戦時中は海軍軍人として駆潜艇を馳つて日本近海の防衛に當つていたわけだが、すでに敗色濃く、東京湾にまで米軍の潜水艦が入ろうかという時期だけに、駆潜艇が逆に潜水艦に追われる様になつていた。氏の艇は熱海近くにはりついていたと、或る時いたずらっぽく話していた。定時報告は常に「異常なし」を打電していた。熱海で高原海軍大尉が何をしていたか知る由もないが、彼の状況判断で艇も乗員も無事だつたわけで、揃つて終戦をわかつたことはまぎれもない事実であらう。

「ガーチャンのモーターボート」

二十八年のインカレにむけて、横浜石川町の連光寺で合宿をしている時、学生の手持っていたウクレレをふと取り上げて一寸だけ演奏された高原監督の旨さに、当時のアプレゲールの学生達は一驚したものである。高原氏が学生達にウクレレをきかせたのはこの時のわずか一〇分位だけだつたが、後で諸先輩にきくガーチ

ヤンのウクレレは、当時の太陽族学生達の想像をこえたレベルであつた。現役時代のガーチャンは、モアナ・コナツツバンドという名のハワイアンバンドを編成し銀座で派手にやつていたという。

「雨の中のガーチャン」

インカレ練習の六月初旬の横浜の或る日。

風も七、八メートル、雨がしとどに降りつゞく梅雨の中の一昨日であつた。高原監督は岸壁の上に立ち練習を見乍ら微動だにしない。多分二時間位立ち放しだつたのだろう。他の大学のヨット部員が感心して「早稲田の監督さんはすごい」といっていた。ヨコハマ・ヨット・ハーバーの名物男になつていた氏について、この話が「高原さんの足元だけはぬれていなかった」という伝説にまでなつたのである。

「温泉を覗く」

昭和28年度夏の新人教育合宿。ところ

は館山の見晴亭。合宿を視察して帰京された高原監督は合宿幹部を一夜東京六本木の自宅に呼び、合宿での教育方針を明確に出された。小手先の技法云々ではない「潮氣をつける」ということだつた。

幹部は教育方針の周知徹底をはかつた。高原監督は、ヨット部を単にヨット好きな連中の集団ということだけでなく、シーマンシップで練りあげられた、自らを、また相互に鍛え合う若人集団をつ

り、その結果としてヨットを強くすることを考えていたのであろう。

「チャンピオンチーム」

高原ガーチャンの監督は二年間だつた。余りの個性の強さで、種々問題もあつた様であるが、早稲田ヨット部は昭和三十年の七月、二代目監督金子四郎氏の下で全日本のチャンピオンチームとなるのである。金子四郎氏は、今この頃を回想して語る。「ガーチャンが作りあげたものが俺の時に花が咲いたんだよ」

このチームは精神的にも強く安定したチームであり、勝つて当たり前という雰囲気すら持っていた。予選レースの合間に、館山海岸の砂浜で竹ボウキを優勝旗に見立てて優勝表彰式の予行演習をしたチームなど他にきいたことがない。

「ガーチャンの力」

高原氏はその後、日本ヨット協会にも力をかされ東京オリンピックにも尽力される。

「世界の運動会のお手伝いさ」と賑やかに走り回つていたガーチャン。昭和四十二年。高原さんが急になくなつたときいて、皆本当に驚いた。ガンであつたというが、一度手術をして直後、再手術にゆくガーチャンはこう言つた。

「医者が下手だから、またやらなくちゃいけない」
そして本人は全く死ぬ気がなく、逝つて了つたのである。

「ガーチャンとはいつもガーガー文句を言うから??
あの声が 名前になつた??
よく知りません。」
(米田晴二 記)